



出稼ぎから学ぶ

南 真木人 (みなみ まきと)

本館研究戦略センター

好景気のネパール

二〇〇七年暮れ、一年ぶりに訪ねたカトマンズはかつてない好景気だった。銀行が競って融資するため不動産は高騰し、バイクや自家用車の数も増えた。高価な輸入品を売るデパートはネパール人の家族連れであふれている。好景気の背景には、マオイスト内乱(一九九六～二〇〇六年)以前の数にまで回復した観光客による経済効果や、停戦後の平和構築に向け莫大な資金と人員を投入する「国連ネパール政治ミッション(UNMILN)」の需要がある。だが、それにも増して大きいのは海外への出稼ぎが定着し、送金による現金が広く市中に出回っていることだ。

ネパールのおもな出稼ぎ先は、サウジアラビア、マレーシア、カタール、アラブ首長国連邦である。その数は年に約二〇万人(二〇〇七年)で、一日平均約五五〇人の移住労働者がカトマンズの空港から出国している。わたしが調査するマガール人の村も例外ではない。二〇〇〇年、村ではじめてサウジアラビアに行った青年ダニヤは、体調を崩し二年の予定が三カ月で帰国した。だが、彼は出稼ぎの経験から、パスポート、飛行機、通貨価値や換算レートなど村の人が知らない世界を体得した。以来、彼は農業のかたわら海外に出稼ぎに行く村周辺の若者をガイドし、仲介する副業にいそしむ。カトマンズ滞在中、ここに月に二度はくるといいうダニヤに会った。

出稼ぎと「外の世界」

会うなりダニヤは「昨日、若者が飛行機に乗りそこねたが、カタール航空の市内オフィスに行つて五〇ドルを払い、何とか今晚のフライトの席を確保してきた」と矢継ぎ早に話した。空港に入る若者に彼は、「鹿のマーク」を目印にカタール航空のカウンターに並ぶよう指示した。そうだが、若者はジェットライト航空のデリー行きのに並び、そうしているあいだにドーハ行きのカタール航空便は離陸してしまつたという。居合わせた若者にわたしは「何故これはカタール航空の列ですかと前の人に聞かなかつたの?」と尋ねた。彼は落ち込む様子もなく「聞いたんだ。でも前の人がそうだといいたし、その人もドーハ行きの便に乗りそこねたんだ」という。申し訳ないが、吹きだしてしまつた。さらに、ダニヤに「こんなことはじめてでしょうか?」と聞くと、彼は「いや、この六年に四六人くらい送つてきたけど六、七回はあつたといつて笑う。そして、若者に「ダニヤに五〇ドル分を返済してくれ」という父親宛の手紙を書かせ、預かつた。



空港入り口。移住労働者が、不安と希望をいだいて出国する(2008年1月)

海外の出稼ぎに要する諸費用は約三〇万円である。村の人は借金でそれを工面し、出稼ぎ先で月に五、六万円稼ぐ仕事に就いて、二、三年滞在する。ちなみに、ダニヤの仲介料は一、二万円だ。最初は右も左もわからないような村の若者は、こうして渡航と出稼ぎの経験を積み、やがてダニヤのように「外の世界」に通じて帰国するはずだ。出稼ぎはとかく送金の額に関心が向く。だが、出稼ぎは村出身の移住労働者がカトマンズを一跳びして「外の世界」とつながり、それを肌身で学ぶ機会をもたらず。長い目で見たとき、当座の送金より経験や知識が重要なことは、ダニヤと若者の対比から明らかである。ネパールにおいて出稼ぎがもたらすものは、現金にとどまらないのだ。